

〈協同のひろば〉

地域労組運動の理論と実践の人・永瀬さんの死を悼む

地域労組からの労働者協同組合の探求

木下 武男（東京都／法政大学講師）

永瀬さんとのつきあいは、彼の人生の最後のところにあたる。彼が二度にわたる肝臓癌の切除の手術を終えて、癌病棟から帰還した直後のことだった。今でもよくおぼえてるが、1992年5月22日のこと、外谷さんも参加して私の自宅で夕方から深夜まで話し合った。永瀬さんは自分の身体ことを「小宇宙」といい、世界と日本のことを「大宇宙」といい、両方とも激動の時期だったと話していた。彼にとっては、病気の再発を前提にして、残りの人生を「大宇宙」の混乱を見据えて生きていという思いだったのだろう。

永瀬さんは、東埼労組の専従書記長を長くつとめていたが、彼が、協同総合研究所の会員になるにはそれだけの苦難に満ちた道のりがあった。東埼労組の前身は、全国金属板橋地域支部と全国金属豊島地域支部との両組織である。永瀬さんは横浜市立大学を卒業し、就職した後、まもなくして板橋支部の専従をつとめることになった。

全金属板橋地域支部と言えば、労働運動の研究者のなかではちょっとばかり有名だった。なにしろ60年代中頃には750名を擁していたのである。それが、やがて60年代末に250名に減少し、オイル・ショックをへて80年代後半には150名に減少した。豊島支部も同じような経過を歩む。そして、両組合は、労働戦線再編の時に、連合にも全労連にも加盟せず、独自の路線を選択することになる。思想的には全労連系の活動家と同じ立場であったのに、労働組合のあり方で袂を分かたずには、それなりの深い考えがあったに違いない。

このような永瀬さんの運動経験をふりかえれば、彼の解明しなければならないテーマは山ほどあったわけである。彼はよく話していた。何故、日本の労働運動は個人加盟制を重視する視点を失ってしまったのだろうか、労働組合の政党への従

属をどう分析すればいいのだろうか、日本の労働運動をきちんと総括しなければいけない。

そのようななかで、永瀬さんが最も強調し、また独自路線を選んだ理由ともなったのが、「中小企業における労働運動のあり方」というテーマだった。地域支部というのは、中小零細企業の組合が集まった組織である。「単純対決」や階級性の強調だけではすまないことは地域支部の後退の歴史がよく教えている。それではいかなる路線なのか。中小企業分野における労働運動の今後の可能性として彼は、労働者協同組合を発見したのである。いろんな方向から、労働者協同組合に向かう流れがあるが、永瀬さんは中小企業における経営と労働と運動のあり方という道から労働者協同組合にめぐり合った。

しかし、経営的にも困難をかかえている中小企業のなかで、組合運動として労働者協同組合の理念を活かすにはどうすればよいのか。理念を運動の場面に移すのは、まだまだこれからだった。話し合わなければならないことは沢山あった。

永瀬さんが93年6月の立命館大学における協同集会に出席し、さっそうと発言する姿に私は病魔も遠のいたという印象を受けた。しかし、去年の暮れから様態が悪くなった。再発ではない。肝臓の片方を除去しても再生してくるのだが、手術の前の抗ガン剤の投与によって胆管を傷め、肝不全になってしまったのが原因だという。肝臓癌を克服した希な事例だといわれていたというから、返す返すも残念なことだ。たったの3年間のつきあいだったが、癌再発の不安をかかえていたにもかかわらず、楽天的な笑顔をたやさず現実に真摯に向かい合う姿勢に心うたれるものがあった。

日本における労働運動の再生を議論し合える数少ない大切な友人を失った。合掌。

城北地域労組協の運動と永瀬博忠さん

外谷 富二男 (埼玉県/城北地域労組協事務局次長)

城北地域労働組合協議会(城北地域労組協)は旧全金板橋地域支部と旧全金豊島地域支部が、①中小企業労働組合運動の探求、②未組織労働者の組織化、③個人加盟制労働運動の解明というテーマを掲げて10年前に発足した。

この組織の発足に至る経過においても、また、この組織が発足して以後の運動の理論と実践においても、永瀬さんは、常にリーダーとしての役割を發揮してきた。

当時は労戦問題で、連合にいくのか、全労連にいくのか、二者択一的な選択が迫られている時でもあったが、私たちは、中小企業現場の実情や、それまでの私たちの実践経験から、どちらにも属さない第3の道を選択した。総評の果たした積極的な面は評価しつつも、労戦問題の経過の中で変質し吸収された原因として「未組織労働者の組織化への取り組みの弱さ」「政党との関係の未成熟さ」「人的育成の欠如」を見ていた。

事業所の90%以上を占める中小零細企業、この組織化なくして日本の社会変革はありうるのかというのが、彼の実践的なテーマであった。

中小零細企業における組織化をめざすためにも、中小企業の現状にあった運動の探求が必要であった。彼は「資本論」の解明については、学者、研究者に伍すほどの勉強家であったが、彼にとっては、それは中小零細企業の現状を改革するための「変革の理論」であった。未組織労働者の組織化のたいへんさや、中小零細企業での労働運動の困難さを実践する中で、彼の到達した理論は「反独占中小企業擁護」というものであった。

組織化の活動を真剣に取り組まなければ中小の現場にあった運動理論は構築できないし、現場の感情にもあった理論がなければ組織化も進まない。実際、彼はどんな些細なことでも労働者から相談があればそれをおろそかにせず、真面目に接し、同じような問題を繰り返し持ち込んでもねば

り強く対処した。「組織化」に対する彼の考えは、単に組合へ加入させるということではなかった。単純に数が増えればよいというものでもなかった。

中小の職場で労働者の要求を組織し、実現させる資質と民主主義を定着させる労働者・群をつくり出すことであった。事実、城北労組協の中には一人職場(組合員が一人しかいないという意味)で、諸要求を実現させているたくさんの事例がある。

城北地域労組協の10年のあゆみの中で私たちは新たに二つのテーマを追加した。「労働者協同組合を労働組合が持つこと」「人的育成のための共学舎運動」である。

中小の職場で運動を進め、組織化をはかるには、ワーカーズコープの運動と実践がどうしても必要である。また、中小企業で働く労働者が卑屈にならずに自己を高め、実践を通じて運動の理論化をはかるには相当の学習が必要である。とりわけ「共学舎運動の定着化」は永瀬さんの夢であった。今、共学舎運動は2年を経過している。

10年のあゆみのうち7年は、彼の闘病期間である。癌の告知を受けて後、まさに癌と向き合い、闘病というにふさわしい姿勢を貫いた。そのかいあって、癌は奇跡的に克服されたのであった。この期間は、彼は私たちに「生きるということとはどんなことか」を身をもって教えてくれたように思う。

彼が口癖のようにいっていた「より良い人生を生き抜くものこそがより良い死に方をするのだ」という言葉どうりの人生であった。